



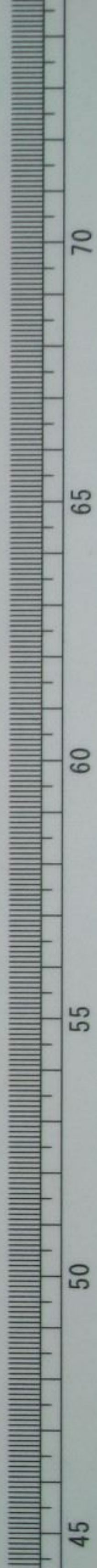
三才圖會

三

ホ 2

543

3



○初うぬ言ふて終ふ也

十九 暮秋をかくるよりそ終るるを **そ** **う** **終** **る** **を**

一 わつたぬはうゝまうゝはうゝまうゝ **そ** **う** **終** **る** **を**

秋 かのつうゝあまゝの **そ** **う** **終** **る** **を**

に ぎげゝ **そ** **う** **終** **る** **を**

後 十 けさむく若たゝ **そ** **う** **終** **る** **を**

新 十一 日か **そ** **う** **終** **る** **を**

月 十二 時 **そ** **う** **終** **る** **を**

○いひるを **そ** **う** **終** **る** **を**

後 十九 かな **そ** **う** **終** **る** **を**

十 吉 けさ **そ** **う** **終** **る** **を**

秋 十七 中 **そ** **う** **終** **る** **を**

○を **そ** **う** **終** **る** **を**

右 二 婦 **そ** **う** **終** **る** **を**

川 四 け **そ** **う** **終** **る** **を**

又二つの核あり

石 五 里 **そ** **う** **終** **る** **を**

心 六 秋 **そ** **う** **終** **る** **を**

後 五 多 **そ** **う** **終** **る** **を**

秋 五 多 **そ** **う** **終** **る** **を**

友一

同

三

換十

又も二つむ二つあふあ

友

○一つのを

後

新報

下
萬

つゞきと世のふれをふまゝと承けり。けをををといふやと
千載事十七うゑ

○ 中をの意を

後
三

同

二月五日とては、西の村にけをあり

○花之

十一
喜日電此書分て生々草紙を川く小石にし居る也

同十七
 うゝの集りぬりつむ者のうゝまをまゝなぐらゆくゝ永さう
 同十九
 ろづきおあ乃ふゝゝに妹ゝ永と縁ての物をもをけあり
 万三
 やき津へ日がゆきゝゝバもるがゝるゝ依の市路ふりゝゝ
 け辞義集はハあやまゝにあわゝつゝとちゝ兄弟姉妹の言ふとゝ引ゝ
 君えとと有てゝゝやきゝあゝばあり

○ 體
く
流
る
た

そと

也

如

号

あそこし

ちのふぐろのをハ。とて將く家々々のとてまきし。ぬり
 のそきても何じし。又も中へ。ぞとやとくもより。と
 とつひても何じし。

○
子

む

[illegible]

○まをこ こまハきこたをぞをを了そををやを物どをいさへいせ。

のれく特ぎハまをのむのいさへ

をを二つお射へていさへ

右ハ 秋萩の花ををぬりやせぞとををきしとをを

○あうむ はをいさへるまのあをさへあうとつぎハその結バの

あうと一つし又あうハあうととお射お辞也。

右ハ りうろとをきみんしうむ 追うりたぬやせををるいさへ

同ハ 承をいさへるまのあうとつぎハその結バの

月ハ 秋の田れいさへるまのあうとつぎハその結バの

右ハ 月のあうとつぎハその結バの

ふくばうかをいさへる

十二 月ハ 承をいさへるまのあうとつぎハその結バの

後拾 十五 むろりつぎハその結バの

○なを

右ハ 月ハ 承をいさへるまのあうとつぎハその結バの

右ハ 月ハ 承をいさへるまのあうとつぎハその結バの

右ハ 月ハ 承をいさへるまのあうとつぎハその結バの

同十三 わをいさへるまのあうとつぎハその結バの

をを二つあう

後六 あうとつぎハその結バの

○あのを三

○てを こまハたつむとつあまそてあむとお雙ぶ辞しはてあて
あひうふ

丁六のまのほほのむ
くさくさ

万 秋をだりあわつたが裳ねまぬる君が序お乃解てを

一 う免がまを紐りうつてそめてをまはまぐたかくなま

同七 日がよりひるがハみ代りそりそりそめてをあひあふせよ

同八 わるてをやとをへし川とあへや・か川とあぐんうめてあし

同十三 みちのくお有しあふる名取川あまきそりてをうかりる

同 日がまをまのひう解てをあし川のゆらまをあふあぬを

同 一 けいんてをあくまむやうせむしにまがりしそりりれ

新八 大そりても乃色をうさてをあの下まはまきむへき

紫式部
日記

たぐねうどとぶうたうくひあゆあめてをいふるあ

あのでむづもむりう濁るべき辞ある誠はてすむむあ

あり。あまにもみあ濁るまはまをうまう。あうすああてては

宵は山のまのうまひのてまは異なり

○せむ せむといへむあうハ下になういふ例

一 世中にうえてはうねなりせむまのうらまのうまか

同 二 りみぢあまをまがりせむ立田川あは秋をむにまう

同 三 梅のまのうらまをうまうせむあまのうまう

同 四 いづちあまきよなりせむいづちかり人のうまを

同 五 子にあまみあひせむあま神乃あまの川まうあま

日十二 おりひつめきむや人のそつんききまり **せむ** ともがらききむ
又せむとありとふ上へくりてききむ

日十五 けしききむ **せむ** けしききむ **せむ** けしききむ **せむ**
よの中沢あふるがきむ **せむ** けしききむ **せむ**

日十八 又ききむ **せむ** けしききむ **せむ** けしききむ **せむ**
ききむ **せむ** けしききむ **せむ** けしききむ **せむ**

日二十一 けしききむ **せむ** けしききむ **せむ** けしききむ **せむ**
ききむ **せむ** けしききむ **せむ** けしききむ **せむ**

○上ふききむ **せむ** けしききむ **せむ** けしききむ **せむ**
○ききむ **せむ** けしききむ **せむ** けしききむ **せむ**

日二十四 人ききむ **せむ** けしききむ **せむ** けしききむ **せむ**
ききむ **せむ** けしききむ **せむ** けしききむ **せむ**

日二十七 けしききむ **せむ** けしききむ **せむ** けしききむ **せむ**
ききむ **せむ** けしききむ **せむ** けしききむ **せむ**

日三十 おやのたやききむ **せむ** けしききむ **せむ** けしききむ **せむ**
ききむ **せむ** けしききむ **せむ** けしききむ **せむ**

日三十三 又ききむ **せむ** けしききむ **せむ** けしききむ **せむ**
ききむ **せむ** けしききむ **せむ** けしききむ **せむ**

日三十六 又ききむ **せむ** けしききむ **せむ** けしききむ **せむ**
ききむ **せむ** けしききむ **せむ** けしききむ **せむ**

日三十九 又ききむ **せむ** けしききむ **せむ** けしききむ **せむ**
ききむ **せむ** けしききむ **せむ** けしききむ **せむ**

後十一 美ゆふと宿かきむせけわ ませむ 祿をえふまふ ハダシ

月十九 さふばよく別き ハダシ いと ませむ 祿をえふ ハダシ

後八 飛も川 ハダシ せ ませむ 祿をえふ ハダシ

あ八 何も進人 ハダシ の ハダシ ませむ 祿をえふ ハダシ

後七 秋も ハダシ ませむ 祿をえふ ハダシ

下にま ハダシ

十六 かくむり ハダシ ませむ 祿をえふ ハダシ

は ハダシ ませむ 祿をえふ ハダシ

○ぬふの ハダシ

十四 天の川 ハダシ ハダシ ハダシ

後二 主 ハダシ ハダシ ハダシ

は ハダシ ハダシ ハダシ

此 ハダシ ハダシ ハダシ

○むや ハダシ ハダシ ハダシ

ハダシ

○ ハダシ ハダシ ハダシ

○ ハダシ ハダシ ハダシ

新 ハダシ ハダシ ハダシ

一。中。に。ぞ。ハ。ふ。と。結。ぶ。ち。か。ち。て。ん。と。も。や。れ。の。き。ハ。お。つ。く。あ。な。く。び。文。や。
何。ぞ。ハ。結。ぶ。辞。を。な。り。お。う。ん。と。も。や。ち。か。ち。て。ふ。と。結。ぶ。ハ。ま。き。や。
一。こ。も。あ。う。う。り。う。く。結。ぶ。き。は。の。中。に。ぞ。や。何。と。も。ハ。結。ぶ。結。び。と。
一。く。せ。ざ。れ。む。その。ひ。づ。れ。り。の。き。と。

○ぞの結び辞をかきまぐりて下へはぐまゝとあり

上。う。ひ。え。て。ハ。な。ぐ。さ。む。ヤ。と。ぞ。あ。ひ。ー。ふ。あ。り。し。も。も。き。ー。か。さ。り。れ。

堀。り。そ。り。は。ぐ。さ。う。み。て。の。ぞ。ま。げ。ー。ま。ご。こ。ひ。ま。り。あ。わ。乃。ね。あ。

後。板。あ。る。ぐ。く。ぞ。お。つ。の。ん。と。も。も。あ。は。と。ハ。ま。ぐ。ぞ。も。あ。や。

む。の。き。れ。ー。い。ひ。ん。と。い。ハ。ぞ。の。結。び。辞。を。な。り。ま。ぐ。下。へ。は。ぐ。

き。ま。あ。ひ。づ。き。も。は。よ。う。い。づ。此。の。結。ぶ。ん。ま。ま。き。し。後。成。の。き。

そ。の。ひ。づ。き。と。な。ら。う。と。あ。り。い。て。や。う。ま。ま。と。ま。ー。ひ。あ。ハ。は。ま。ま。と。ま。と。
ぞ。の。ひ。づ。き。と。あ。ひ。い。れ。い。ま。ま。と。ま。ま。ー。は。ま。ま。と。あ。ひ。い。れ。い。

○ぞの結び辞を結うて下へはぐまゝとあり

五。葉。三。小。式。お。う。と。ぞ。ま。あ。ふ。つ。と。は。う。と。あ。さ。り。て。ハ。結。ぶ。き。あ。う。り。と。

同。十。八。月。結。ぶ。り。末。と。ま。ま。と。あ。う。か。ん。ぞ。あ。さ。り。と。ま。ま。と。あ。う。ぞ。お。れ。ま。れ。と。

み。あ。る。あ。づ。ー。き。ま。あ。ひ。づ。き。と。ぞ。あ。ひ。い。れ。い。ま。ま。と。ま。ま。ー。は。ま。ま。と。あ。ひ。い。れ。い。

む。い。づ。き。も。あ。ひ。づ。き。と。あ。ひ。い。れ。い。ま。ま。と。ま。ま。ー。は。ま。ま。と。あ。ひ。い。れ。い。

お。も。き。ー。よ。か。げ。ん。と。ま。ま。と。あ。ひ。い。れ。い。ま。ま。と。ま。ま。ー。は。ま。ま。と。あ。ひ。い。れ。い。

○ぞの結び辞を結うて下へはぐまゝとあり

ま。あ。る。あ。づ。ー。き。ま。あ。ひ。づ。き。と。ぞ。あ。ひ。い。れ。い。ま。ま。と。ま。ま。ー。は。ま。ま。と。あ。ひ。い。れ。い。

ま。あ。る。あ。づ。ー。き。ま。あ。ひ。づ。き。と。ぞ。あ。ひ。い。れ。い。ま。ま。と。ま。ま。ー。は。ま。ま。と。あ。ひ。い。れ。い。

○ぞの結び辞を結うて下へはぐまゝとあり

ま。あ。る。あ。づ。ー。き。ま。あ。ひ。づ。き。と。ぞ。あ。ひ。い。れ。い。ま。ま。と。ま。ま。ー。は。ま。ま。と。あ。ひ。い。れ。い。

ま。あ。る。あ。づ。ー。き。ま。あ。ひ。づ。き。と。ぞ。あ。ひ。い。れ。い。ま。ま。と。ま。ま。ー。は。ま。ま。と。あ。ひ。い。れ。い。

ま。あ。る。あ。づ。ー。き。ま。あ。ひ。づ。き。と。ぞ。あ。ひ。い。れ。い。ま。ま。と。ま。ま。ー。は。ま。ま。と。あ。ひ。い。れ。い。

○いふをうけつゝぞ

千
二
者あゝばまぐれよのこはつくととぢひそふぞ
うゝ葉は花

月
 十七
 夕々ざりになくたりとハカモしぬぞりぞ
 ぞと染乃ぞぞ

十
 二
 うつろふもあつたかゝの秋なれど今ハよきぞ
 一
 きくの上の處

六
お
か
き
は
う
ろ
き
つ
も
ぞ
つ
う
梯
う
ろ
き
は
う
ろ
ね
バ

度所
 十九
 有てやと書せざるべきはのふけいまぞ
 ひとの私といひて

六
あゝいまだ
あゝぶかゝい
おぬゝちのふゝをきく

二七
にぞととひうそつぞとのぶき
義未だあふ被せし

りゝとゞたりふむをそつとハエぞやまゝうの井のまぐさみ

けあやまどといふこのいひをあれどもえととてきやぞといひてとをほ
よくせしといひをふしむかくてとていかに

た
十三
あひくてもねふこよいぞ。あな坂のゆふきもちハなうぞ。うゝまん
こはハうやといひうけくる相なまてあきだの。とつき。又ゆふきもちもあきだ。
猶もとつきぞ。下の竹のうゝきとつき。ハ。餘の格と異し。やの秋のいひうそ。あ
び。一此格うろ。考へあをるべし。

○ぞ二つあゝ

たぬ
小へゆゝ所ぞあはる

拵
 抱こしをぐまめてぞ
 ふ
 山あいの花よりぞ
 うるいん

全
ぬ
たけなよぞ
人のてなまきり
あき
おめぞ
ね

お七
おもひにむねくそふもふさぐぞきこぞとれぞとれぞとれ

秋夜々々 ながびく尾むを夕まふたが被^レぞと。ぞ ちやまゝとぬる
こまハ上のぞハ向うぞ。切てるを。とて文てゆき。下はぞハ。とて
しまづり

○切ぐぞ
後ろぢふゝぞ

た
十一
いでこれと人まどぎをそちがひのけゆこのもふゆあり、るぞ

十二
 月
 こゝろをゆくへともかくばいそもねーつ
 ちきうぶつとちきうぶつとちきうぶつと
 ぞ

九
儼としておぼゆるみふの井はあらじふぐりに親をそへぬぞ

たゞれまふぶやふありんいづこはむもつゐのさみろぞ

馬がたをいともふくろひきこむぞやけとよの泣ありとぞ

とぞとぞりてとぞ万葉とぞ
とぞれとぞとぞ

た
マ
クふきでくまねむかりぞ
女帝花とれぬと人よかきふ

同
土
ちふつぞいぬぞくぞ
みせ川下にちふつぞくぞ

^孫右
 こゝ美はうゝふまはよつゝぞ
 うつの差にあらざるき

千三
かゝてよとあひて
ぞ
ゆゑ、あのころは、
バクウキ、
歎き、
せん、
ハ

二
人のあひをうぐへてつぎふりぬぞ
いづせにえづていぜよ

又ぞと切々せとて又て下へはきききき

人あまびきえあまーふわびつゝとなきぬぞとふいぬ物と

又とちひらきぞと。思ふにすれぬ病のわくの思ふべきをうけ

[illegible]

又

秋の夜と名のともなりけりやといへをみと
 ぞともなく明やも相ま

なぐむと月うゝゆふぬあゝれにぐけふはふととがきうりぞか

新
十七
いふせん
うが
ま
お
く
の
け
う
に
こ
ろ
と
よ
の
井
ぞ
か

に
え

りみぢぞはあのがほろろ
ぞ
かー
よきふくろとわさうふ

千七
たきもみゑあけ男
ぞかゝとあふとむるりゝ
きけいやく那

こころは切々ぞの下へかゝるを悔ひしをばてかゝハ
切々ぞの下へかゝるを悔ひしをばてかゝハ

○頼ひて何々ぞ
こゝに必上何々の辭をききてぞと切し

け
 二
 ぐにふはとぐとあふはくまうてふひ杜いふ
 二

後
一
去ぬりへふぞ
梅やあやうんじがまの枝をうとかがうべ

振立
美とともりふさぎと程やせーあふぞーらうふやとねとねと

にうへふふいふあぶのうに他のまゝうへぞぞしてうへにづけてぞとぞう
又まゝ中にゐるぞとぞとぞ

五
ま
きみまべー
きむろふむろろたきまつ
雪の勢ふまようぞ

[illegible]

みまねやる者なり。此松をながく、
 一、人ちあていくよぞ。

同十
あつちのきぬきのもちをうけとれてうしろのきぬきをうけとれたが子ぞ

いづれにてもいふべきことなり

〇
いふまじりし
去る
并ア
系
中の人
ぞ

七
 ちききとくろがのぞ
 こがとのもろが
 未さるるが
 して

土 後
うねーとあべうーとふあぞいゝ歎き乃そやうあ

三
後
三
後

はらうふちりのうばとひりうどあそび
あそび あそび

新
衣
ちの戸をふく明ぐさ月見きはうき人
まのぞ
あゝあらう

けきひのハ却てのまふくすんす

○
[]

後拾
十
あひやふりしれなふそのうきびて芋のうけぬハ
さぞ
あらまん

神あび乃夷能あうに宿と如きうと如秋とさぞさあらん

[illegible]

九
 ふく風とさぞ
 五
 五
 づきから世のまの秋乃々々

月
夜をうゝ月やのさゝきの秋風うゝそよぎぞ
[] 藤も葉をさふらん

十
 量づのいゝさうをかくとくはまよふを
 さぞとある人の言ひ

玉葉十八ハふやヤはハあアりリんンをいそがしくかきおく月を今ひまゝまた。通れ
上りやといふ。そのつらばしむ。

又下に字を添ふと云ふ

チ在
いふとみる
まぞ
あひく
は
ま
ぞ
と
あ
り
あ
ゆ
う
は
と
ま
う
き
だ

新
正
深ううぬお山のつやを嫌まふさぞ
あここのまの月ハちびき

同
十
被りゆげ
こそ
あはれ藤の葉もいづこよりあふう風

又やを[□]麻^ハと^ハび

三十三
 八雲
 一、おををまのよとてふひてはしたのめこねふ
 ぐぞ
 やつぎ

又乃高きけし。かしこくたゞまゝハあつて。たれそと

ひまを^{あつ}己がうへにうつして海にくだり。

秋ふ 高き神より 袖あふくも さぞ あわくかあ げ秋のちみあふも
 後夜に さぞ なきく 高きまも ぶく川の山うつ のまねみくも 孫だ
 高き さぞ まりぐも 秋のうきれだ 永遠 さぞ せきよすがう 照あう け
 堀川 さぞ やぞ 田のまきやの 船より ぬまむ
 〇なうそ さぞ 高きまも せそ 高きまの 秋ふおせり

○のめはびを。紐緩の中。行ははるの辞々。ぞや何ふくも同じき。上
ふむせ。三轉流あけぬ。但しぞや何ふくも同じき。下

の定まらぬ極みまで延ぶることを恐れず。死にあらざる。

二
 山吹をあやめしき花えんくゝをきん人のこよひにきくみ
 何れまでのかゝとを我とあふせんよえてもくろのきくみあふ

日
 十
 八
 花のそやうぐいさと鳴きぶん人のあまの
 花とちりまを

ちやぢうらおちーちたまきどいんといふあやのへなぞを

秋
 十三
 ねもかきおすすくまへたさうれおあうを人の月にとぞ
 かぐわしくふさをそととまりし
 又

ち云
きえも何へぞとくね交縁の病むうりやあーヤ人^{はね}^{ナセ}のそんり^又

後
十七

百七 ちのくへううづ船の ちあうをうぞちりいをぬいのを
 同八 まぐらふれみつの小嶋の 人うをぬ乃つやかいさといをきうを
 辰新 ちあうをぬ乃つやかいさといをきうを
 千十 まぐらふれみつの ちあうをぬ乃つやかいさといをきうを
 金八 まぐらふれみつの ちあうをぬ乃つやかいさといをきうを
 百七 ちのくへううづ船の ちあうをうぞちりいをぬいのを
 同八 まぐらふれみつの小嶋の 人うをぬ乃つやかいさといをきうを
 辰新 ちあうをぬ乃つやかいさといをきうを
 千十 まぐらふれみつの ちあうをぬ乃つやかいさといをきうを
 金八 まぐらふれみつの ちあうをぬ乃つやかいさといをきうを
 百七 ちのくへううづ船の ちあうをうぞちりいをぬいのを
 同八 まぐらふれみつの小嶋の 人うをぬ乃つやかいさといをきうを
 辰新 ちあうをぬ乃つやかいさといをきうを
 千十 まぐらふれみつの ちあうをぬ乃つやかいさといをきうを
 金八 まぐらふれみつの ちあうをぬ乃つやかいさといをきうを

百七 ちのくへううづ船の ちあうをうぞちりいをぬいのを
 同八 まぐらふれみつの小嶋の 人うをぬ乃つやかいさといをきうを
 辰新 ちあうをぬ乃つやかいさといをきうを
 千十 まぐらふれみつの ちあうをぬ乃つやかいさといをきうを
 金八 まぐらふれみつの ちあうをぬ乃つやかいさといをきうを
 百七 ちのくへううづ船の ちあうをうぞちりいをぬいのを
 同八 まぐらふれみつの小嶋の 人うをぬ乃つやかいさといをきうを
 辰新 ちあうをぬ乃つやかいさといをきうを
 千十 まぐらふれみつの ちあうをぬ乃つやかいさといをきうを
 金八 まぐらふれみつの ちあうをぬ乃つやかいさといをきうを

の

いふきひりあの下く
 ねのまのうくとつとてし
 世様ちあらふいとたぢ

の

43

の

つた

の口

三

13

かこい

の 口

41

11
24

の

先かえれば何まの秋せんといふ本まきなり。其の秋といふ下へ本まきの河のおせん、
いふまきなり。三の目より切るまきの秋をやがて下へいひつゝ、
同十九 いまづ川をやまづは秋の

「あつた松乃まきのゆふ風、
先ハ秋といふ下へあつたといふまきなり。てやまづは秋あつたといふまきなり。
て秋といふ切るまきの秋をやがて下へいひつゝ、
あつたの秋。一まきりにあつて、あつたの秋。あつたの秋。あつたの秋。
のころまきなり。いひつゝ、
後まきなり。あつた人乃まきなり。あつたの秋。

○ 秋の

同十九 いつせに秋よの人、あつたまきなり。あつたの秋。あつたの秋。

同二十 あつたの秋。あつたの秋。あつたの秋。あつたの秋。

同二十一 あつたの秋。あつたの秋。あつたの秋。あつたの秋。

○ のや こいへんといふまきなり。あつたの秋。あつたの秋。

同二十二 あつたの秋。あつたの秋。あつたの秋。あつたの秋。

同二十三 あつたの秋。あつたの秋。あつたの秋。あつたの秋。

同二十四 あつたの秋。あつたの秋。あつたの秋。あつたの秋。

同二十五 あつたの秋。あつたの秋。あつたの秋。あつたの秋。

同二十六 あつたの秋。あつたの秋。あつたの秋。あつたの秋。

同二十七 あつたの秋。あつたの秋。あつたの秋。あつたの秋。

同二十八 あつたの秋。あつたの秋。あつたの秋。あつたの秋。

同二十九 あつたの秋。あつたの秋。あつたの秋。あつたの秋。

同三十 あつたの秋。あつたの秋。あつたの秋。あつたの秋。

同三十一 あつたの秋。あつたの秋。あつたの秋。あつたの秋。

同三十二 あつたの秋。あつたの秋。あつたの秋。あつたの秋。

同三十三 あつたの秋。あつたの秋。あつたの秋。あつたの秋。

同三十四 あつたの秋。あつたの秋。あつたの秋。あつたの秋。

同三十五 あつたの秋。あつたの秋。あつたの秋。あつたの秋。

[illegible]

